

KONAN UNIVERSITY

# ベーオウルフ：韻文訳三 一〇五〇行-一五五六行

著者	枅矢 好弘
雑誌名	言語と文化
巻	5
ページ	1a-21a
発行年	2001
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00001552">http://doi.org/10.14990/00001552</a>

ベーオウルフ (韻文訳 三一〇五〇行―一五五六行)

枡 矢 好 弘

第十六節

その上さらに

戦士を統べるこの王は

ベーオウルフの供として

海原をわたり来た者たちの

一人一人に宝物を

伝来の宝の品を

蜜酒の席にて取らせ

グレンデルが邪心に狂い

手にかけて命脈絶った

ひとりの者の生命の償い

黄金をもつてなせと命じた

明哲の神の叡慮と

かの人物の勇氣によつて

運命を押し阻むこと叶わずば

デネ人のさらに多くが

一〇五〇

その生命奪われること免れず  
主は今日同様人類のすべてを支配  
それ故にそのこと悟り先を見通す英知もつのが  
いずこにあつても最善のこと

一〇六〇

この戦乱の世に命ながらえ  
この世の生を楽しむものは  
楽しきこと 厭わしきこと  
数多く見るは必定

一〇五五

ヘアルフデネの御子 全軍の将  
フロースガールの御前で

歌声と楽の音まざり

飲びの木 堅琴響き

物語り詩 いくたびとなく朗詠われる

フロースガール王の詩人

蜜酒を汲む床机のはざままで

余興の朗吟なすべき頃合

一〇六五

その朗吟 フリジアの王フィンの子息にふりかかる  
奇襲にまつわる物語

デネ人(びと)の一部族 ヘアルフデネ(56)を率いる英雄

デネの王族 シュルディングの人 フネフ

ジュート(57)の地フリジアの

死闘に果てるさだめであった

フネフの妹ヒルデブルフ

宿恨いだくデネとフリジア和解せんため

フリジア王の後となった

まこと後はもはやジュートの

忠節を称揚するいわれなし

なんの咎(とが)なくヒルデブルフは

盾打ち交わすこの戦いで

致命の深手 槍傷のため

愛しき人人 息子と兄を奪われる

げに 悲嘆にくれる女性(にょしやう)となった

フィンの客人(きやくう)フネフの一隊襲ったものが

フリジア人(びと)の何者なのか知る由もない

ホークの娘ヒルデブルフが

運命(さだめ)を知って嘆くのは無理からぬこと

それまでは歓喜に溢れて過ごしたこの世

朝になり同じ世界で

愛しき人の無残な死を知る

一〇七〇

フィンの重臣わずかを残してことごとく  
この戦いに討ち死にし

フィン王はこの合戦の場において

フネフが股肱の臣

ヘンイエストに相対し

戦い抜くこと到底あたわず

生き残った者どもを

武力をもつて救い出すこと叶わず

フリジア勢はデネに対して

和睦の条件提示する

館(やかた)の他の場 玉座も広間も

すっかりそのまま明け渡し

館を支配する権利

デネ人(びと)たちとジュートの子供が等分に

フォルクワルダの息 フィン王が

財宝さずけるそのときは

日日(ひび)デネ人(びと)たちに敬意を払い

ビールの広間でフリジア人(びと)の一族の

士気鼓舞するのとまったく同様

ヘンイエストの軍勢に宝環授け

金箔はった宝物(ほうぶつ)さずけて敬意を示す

強き拘束力をもつこの和平の協定

一〇八五

一〇九〇

一〇九五

双方ともに受諾する

心からなる誠意をもってフィン王は  
ヘンイエストに誓いを立てる

余は評定の者たちの意見に従い

この災厄の生き残り

惨めなるデネの武人に

榮譽を与え処遇する

フリジア人の何者であれ

言葉によりあるはまた行為によつて

協定を破ることこれを許さぬ

敵意からでる不満のことば述べるを許さぬ

君主を失い宝環さずける己が主君を

刃にかけた者に従う羽目とはなつても

心ならずも生じた結末

フリジア人の何者であれ暴言はいて

かの血まみれの宿怨の

記憶呼び戻すなら

剣の先にて事を収める

フィン王はこのとおり誓いのことば述べ

みごとな黄金を宝物殿より運ばせる

戦に長けたシュルディングの

戦士の中でもその武勲

並ぶ者なき戦士の遺骸

一一〇五

今埋葬の薪の上に

血にぬれた鎖鎧が

鋼のごとく堅く仕上げて

一面に金箔張った

猪かたどる立て物が

手傷に斃れた数多の貴人が

茶毘の薪にくつきり見える

多くの者が刃に斃れた

ヒルデブルフはその時命じる

わが息子 伯父フネフの傍らにおき

葬火にゆだねよと

骨つつむ器 身体を茶毘にふせ

焰の中におくべしと

この女性嘆き悲しみ挽歌を歌う

戦士 王子の遺体薪の上に安置さる

葬送の焰 その中の最大のもの

螺旋のごとく立ち昇り雲にも達し

塚の手前で轟音となる

戦士たちの頭熔け

傷口はじけ

憎悪の嘔み傷血潮吹きだす

貪欲この上なき悪魔 焰

戦が連れ去りし者のすべてを

一一一〇

一一一五

一一二〇

敵味方いずれを問わず呑み尽くす  
戦士たちの栄光は去る

第十七節

戦友今は亡く  
ジュート族の戦士たち  
フリジアの地を<sup>(59)</sup>目にしたく  
故郷をめざし高き砦へ去ってゆく  
ヘンイエストはその時いまだ  
殺戮の血にまみれた冬を  
フィンのもとの寓居で過ごす  
心はまったく楽しまず  
輪になった舳先もつ船  
海原に漕ぎ出すこと叶わずとも  
望郷の思いは消えぬ  
海は嵐もようの空に波立ち風に<sup>あしが</sup>抗い  
冬の季節が氷の枷で波浪を縛る  
今と同じく相も変わらず  
家家に年改まり  
天候が季節の変化正しく守り  
明るく輝く日日となる

冬は去った

大地の胸は麗しい

異境の住まいを余儀なくされた客人は<sup>まろし</sup>  
館<sup>やかた</sup>の退去を強く思う

だが彼の思いは航海よりも

受けた仕打ちの報復にある

ジュート族の子らのこと胸奥<sup>むなおく</sup>にあり

心にかかるは戦い仕掛ける方策のこと

かくしてヘンイエスト

部下の戦士 フーンラーフの

息子フーンラーヴィング

刀の中の優れもの

その切っ先の鋭さが

フリジア人<sup>びと</sup>に知られた業物

戦<sup>いくさ</sup>で輝く名剣を

ヘンイエストの膝に預けて

復讐を求める心中見せたとき<sup>(60)</sup>

その心はねつけはせず

復讐するのは世の慣い

かくして豪胆なるフリジア王フィン

己<sup>おの</sup>が館で容赦<sup>やいば</sup>なき刃<sup>やいば</sup>にかかり

惨殺の憂き目みる

デネの武人グースラーフとオースラーフが

海原を越え

呵責なき攻撃に 受けた災禍に

悲痛の思いあらわにし

デネ人に苦悩の分け前与えたことを

詰ったときのことだった

安らぎえられぬ彼らの思いは抑えがたく

仇の屍広間をうずむ

フィンもまた 守護する武人の間にあつて刃に斃れ

后はデネに捕らわれる

シュルディングの戦人

フィンの館で見出す限りの

首飾り 珍しき宝玉など

この国の王の家財の一切を船へと運ぶ

かの高貴な女性は海路を越えて

その女性の国民のもと

デネの国へと連れ戻す

詩人の歌 朗吟終わる

歎びの声ふたたび起こり

床机のさんざめきひとときわ高く

酌取りの者 見事な酒器から

ワインを注ぐ

このときウエアルフセーオウ姿みせ

黄金の飾り環つけて

一一五〇

かの高貴な二人 叔父と甥<sup>(63)</sup>  
座する所へ歩を運ぶ

二人の絆今なお固く

互いに偽る心なし

お側御用のウンフェルスもまた

シュルディングの王の足下<sup>(64)</sup>に

刃まじえるとき来れば

親族とても容赦せぬ気性なれども

ウンフェルス武勇にすぐれ

これら王家の人人はその心根に信をおく

このときシュルディング王家の女性口開く

「わが気高き陛下 財宝を分け与える方

このお杯お受けあそばせ

戦士たちに黄金振舞うやさしきお方

ご機嫌麗しくいらせられませ

イエーアトの方方にしきたりどおり

優しきことばをお掛けあそばせ

イエーアト人にお情けをおかけくださり

近隣からまた遠くより

手に入れられた宝物

贈られることお忘れなきよう

陛下はかの戦士を

わが息子にと思し召しとか

一一六五

一一七〇

一一六〇

一一七五

宝環さずける輝けるこの館  
牡鹿館の浄めは成就

褒賞の授受かなう間は数数の

褒賞与えてかの武人の心お満たしになり

天命尽きて逝かれるときは

王国とその国民を身内のものにお遺しあれ

わが慈愛深きフローズルフのこと

わたしは存じております

シュルディング族の殿なる陛下が

もしフローズルフに先んじて

世をお去りになることあるならば

フローズルフは若き吾子たち

その体面を大切に

守り立ててくださりましょう

思いまするにフローズルフが幼少の日日

幼き甥御の喜びと誉れのために

われら二人がさずけた恩恵

その一切を思い起こせば

心優しくわが息子らに

酬いて下さることでしょう」

かく言いおいて後は向かう

息子たちフリースリーチとフロースムンドが

戦士らの息子たち 若き者らと

一一八五

共にいる床机のところへ

かの勇者イエーアト人のベーオウルフ

兄弟二人の傍らに座す

一一九〇

第十八節

后はベーオウルフに酒盃さし出し

親しきことばで盃勧め

親しげに金の環飾り 一双の腕飾り

戦衣に鎖の鎧

聞き知ることない大きさの

首飾り下し与える

伝説の戦士 荒れるハーマが

フローディング族の秘蔵した

かつては女神フレイヤのものときこえる首飾り

高価な台に宝玉はめたその首飾りを

輝ける砦にもち帰つて以来このかた

英雄の秘蔵する宝の蓄え

この首飾りに勝るもの

天地のもと聞きおよんだ覚えなし

暴虐の人ハーマ

東ゴート王エオルメンリーチェの姦計逃れ

一二〇〇

永遠の教えを選び修道院に入る<sup>(66)</sup>

ペーオウルフの賜る首飾り

スウェルディングの甥

イエーアト族の王ヒイエラークが

最後となった遠征で

軍旗のもと戦利品を 宝物を

死守したときにその首を

飾っていたもの

武勇におごり艱難求め

フリジア人の宿怨をうけて立つ時

運命が王を連れ去った

この首飾り宝玉身につけ

満々と波をたたえた酒盃を

乗り越えて渡り来た王

威風あたりを払う君

盾のもとに斃れ臥す

王の遺体と胸つつむ鎧

首飾る宝玉ともども

フリジア人と同盟結んだ

フランク族の手に落ちた

イエーアト人は敵軍の刃の餌食

戦い果てて戦士たち

屍群れなす野に横たわり

一二〇五

雑兵ども掠奪はたらく

広間には人人の喝采の声

ウエアルフセーオウ口開き

一同を前にして言う

「親しきペーオウルフ 若き武人よ

その首飾りお使い召され

武運に恵まれ給わんことを

その戦衣をお召しあれ

その首飾りその戦衣は部族の宝

いついつまでも幸い召され

武力でもってそこもとを世に示されよ

ここな年端のゆかぬ者たち

親しきことばでお導きあれ

そなたへの報いは忘れぬ

人人そなたの勲しのゆえ

風の故郷 海原が

切り立つ岸辺を取り囲むこの大地

その隅隅で 近隣にても遠き方でも

久しくそなたを称えることとなりましょう

貴きお方 生ある限り栄えあれ

価値高き宝をそなたに授けましょう

幸多き人ペーオウルフよ わが息子よしなに

一二二〇

一二二五

一二二五



この場の面面 互いを裏切ることのない

心優しく主君に忠義の戦士たち

家臣たちは結束固く

軍 戦の備え怠らず

酒盃かさねたこの戦士たち

わたしの願いのまま動く」

后はそこで座に戻る

宴の場には馳走の絶品

男たち美酒に酔う

己が運命を知ることもなく

夜になりフロースガールが

この王者が

寝所に下がり給いしあと

床に就かれてのち

数多の戦士に起こったとき

身の毛もよだつかつての宿命

待つとも知らずに

広間には夥しき戦士が残る

過ぎ越し日日にしたごとく

床机おく板間は片付き

床並び枕おかれて寝所となった

ビールのむ戦士の中の一人の者

一一三〇

やがて死すべき運命にあつて

広間の床に身を横たえた

戦の円盤 輝く木の盾

枕辺に戦士たち置く

床机の上にはつきり見えるは

戦陣に峙つ兜

鉄の輪つないだ鎖鎧

輝く長鎗

故国にあつても征旅の時も

主君の身に必要生じるその時のため

戦の備え常日ごろ怠らぬのが

彼らの慣わし

この種族は優れたる民

一一三五

一二五〇

### 第十九節

戦士たち眠りに落ち

その中のひとりの者

夜の憩いに痛ましき代価を払う

この代価 厄難は

黄金の館をグレンデルが占拠して

危害を加え

一二四〇

一二四五

罪業かさねた挙句の死

最期の時が訪れるまで

幾たびとなく戦士らに

降りかかったあの災禍

かの憎むべき仇死してのち

悲しき闘いのあとを永きにわたり<sup>(68)</sup>

忍ぶひとりの復讐者

生きてこの世にあることが

明らかとなり知れ渡る

雌の怪物 グレンデルの母親の

悲痛の思い消えはせず

カインが父方の身内 ただ一人の弟を

刀にかけて殺害のあと

恐ろしき水 冷たき潮に<sup>うしお</sup>

生きる定めとなっていた

カイン罪人<sup>つみびと</sup>となり

人殺しの烙印押され

人の得る喜びすてて

荒れ野に住んだ

運命の定める悪霊 数多く

このカインから生まれ出る

獐猛なる血に飢えた獣<sup>けもの</sup><sup>(69)</sup>

かのグレンデルもその一人

一二五五

グレンデルは牡鹿館<sup>おじかやかた</sup>で

眠らずに闘いを待つ男子<sup>おのこ</sup>に出会う

邪鬼この武人に掴みかかるが

勇者<sup>おの</sup>己が力の強きこと知る

この強さ 神からさずかる豊かな才能

勇士は天佑を願ひ

神助を乞い加護を願う

万能の神の力に助けられ

この勇士 仇敵征服

地獄の悪霊取り鎮む<sup>しず</sup>

この悪鬼 人類の敵

惨めなる姿で落ちゆき

喜び奪われ死の床を見る

悪鬼の母親

貪婪<sup>さか</sup>にしてその性鬱鬱<sup>さか</sup>たる者

息子の死に報復するため

悲しき旅に出で発たんとす

女怪物<sup>おんなかいぶつ</sup> 牡鹿館にいたり着く

広間の中は宝環の民<sup>びと</sup>デネ人ら

其処<sup>そこ</sup>ここ彼処<sup>かしこ</sup>と眠り込む

グレンデルの母親が中に入るや忽ちに

戦士らにとり状況一変

一二七〇

一二七五

一二六〇

一二六五

一二八〇

だが戦士たちの恐怖さほどにあらず  
 裝飾ほどこし鎚で鍛えた刀でもって  
 血しぶき浴びた強き刃の刀でもって  
 敵兵の兜の上の猪の像叩き切る

一二八五

そのときの男に較べ  
 女の力 女が戦う戦の恐怖  
 それほどのものとは思えず  
 広間の中は戦士たち

床机の上の刀剣を  
 硬き刃を抜き放ち

一二九〇

幅広の盾 手でしっかりと掲げもつ  
 だが危難にあわて何人も  
 兜のこと思い浮かばず  
 胸幅広い鎖鎧に思い至らず  
 女怪物その姿認められるや  
 慌てふためき 生き延びんため

広間の外に逃れんとする  
 速やかに貴人の一人をしつかと掴み  
 沼地を目指し逃れゆく

一二九五

この貴人 海原二つが取り囲む国  
 その国でフロースガールの御覚え  
 一際めでたき戦士の一人  
 側近として仕えた武人

剛力の人 盾もつ戦士

勇名をはせた人

この貴き人を女怪物

己の寢床で食い殺す

ベーオウルフはその時広間に居らず

音に聞くこのイエーアト人は

宝物の授与うけたあと

早くから別の寢所を賜っていた

一三〇〇

牡鹿館に叫喚の声

女怪物血にぬれた件の腕を奪い去る

悲しみは新たになつて館を襲う

双方ともに味方の命で

斃した生命の償いをする

一三〇五

この遣り取りは嘆かわしきこと  
 白髪いたたく戦士 賢明なる王

このときひとりの重臣

こよなく恩寵与えた臣息絶えて

その生命失せしこと知り悲嘆にくれる

王の寢所へ勝ち戦呼ぶベーオウルフ

急ぎ召し出だされて駆けつける

一三一一〇

夜が白むとき

勇者の中で一際すぐれたこの戦士

部下を引き連れ

賢明なる王の待つ御座所に向かう

王はその時全能の主が

この悲報 そはそれまでとし

事態の変化を許し給もうか

不安に心かき曇る

武勇あまねく知られた人は

部下ともどもに床踏み渡り

館に足音鳴り響く

この武人賢明なる方 イングウィネの君主に対し

ことばを掛ける

み心に叶う心地よき夜を過ごされしかと

一三二五

一三二〇

## 第二十節

シウルディング人統べる王

フロースガールはかく宣う

「幸福のこと尋ねるでない

デネ人の新しき悲しみ始まる

アッシユヘレが今は亡い

ユルメンラーフの兄アッシユヘレ

余の腹心 わが相談相手

互いの軍勢衝突し

一三二五

猪の像打ち合った戦において

われらが頭を守ったときに

肩を並べて立った仲

アッシユヘレは英雄の また

すぐれた貴人の鑑であつた

さまよえる殺戮の鬼

牡鹿館でアッシユヘレ

武器使わずに亡きものとする

この恐ろしき者 死体に喜び

馳走に喜悅しいずこの方へ

立ち去ったのか余には分からぬ

この女怪物 仇を取った

昨夜そなたが強き手の握力により

すさまじき方法で

グレンデル斃したその仇を

そなたの行い グレンデルが

余りにも永きにわたり

余の国民を殺害し

その数減じたためではあるが

グレンデルは生命もつ権利失い

闘いに倒れて果てた

今もう一つのもの 力強き邪鬼現れて

己が身内の復讐せんとす

一三三〇

一三三五

この鬼は遠き方より

復讐の心を抱きここに來た

この事実

財宝を分かち与える余のために

心の中で涙する

多くの家臣たちにとり

心中の辛い責め苦のごときもの

みな望みが叶うよう

助けるために差し延べた手は

もはや動かぬ

余はこの国に住むものたちが

余の国民と広間に座する評定人<sup>ひょうじやうびと</sup>が

かく語るのを耳にした

辺界に出没する二人の巨大なるもの

異界の魂魄

荒れ野占拠し居座り居<sup>わ</sup>つたと

余の国民<sup>くになみ</sup>らはしかと知る

一人のものは女のごとき姿態と振る舞い

あとの一人は無残な格好

男の姿で流人の道ゆく

ただ図体<sup>だいてい</sup>の大なること敵<sup>かな</sup>う者なし

地上に住む者過ぎ越し昔

この怪物名づけてグレンデルという

一三四〇

グレンデルはその父分からず

他の魂魄の秘めたる誕生

その有無もまた人人知らず

彼奴<sup>かやつ</sup>ら二人 人間の足踏み入れぬ

狼の丘 風吹きすさぶ湖水の岬

羊齒<sup>やうし</sup>のおう道なき道

崖のふもとの暗き所に

山中の急流流れ落ち

地下の水溢れ湧く場所

これら秘境を占拠する

その湖水まで幾マイルとない

霜<sup>しも</sup>いたたく森 湖水にかかり

しっかりと根を張る木木が

湖面をおおう

湖上では夜毎夜毎に

恐ろしき不思議な光景目に映る

満々と湛えた水に火が燃える

水底<sup>みなさぞこ</sup>の様知るさほどの賢者

人の子の中には居らぬ

ヒースの丘を歩む獣<sup>けだもの</sup>

強き角たくわえた牡鹿

犬に追われて遠くより逃げ

森求めるも水際<sup>みぎわ</sup>にいたり

一三四五

一三五〇

一一一

一三五五

一三六〇

一三六五

一三七〇

水中に頭かくして身守るより  
岸边にて魂手放しその生命捨つ

心地よき場所にはあらず

風がたち激しき嵐起こるとき

水面から黒き雲まで波立ち上がる

やがて大気は暗鬱となり

大空が涙を落とす

今再度の助け頼めるはそなたのみ

かの極悪非道の生き物が

その姿現すところ

危険なる場所は知られず

そなたに勇氣あるならば捜し求めよ

そなたが生きて帰るなら

余はグレンデルのときと同じく

この闘い 金品をもち

年経れた財宝もつてそなたに酬いる」

一三七五

友の復讐大いなる哀悼に勝るもの

誰しもこの世の末期を待つのは避けえぬさだめ

生あるうちに榮えある行い

為しうる者には為さしめ給え

その行為戦士にとつて

後死したときすべてに勝る

お立ちくだされ 王国を守護する御方

グレンデルが身内の女の

辿りし跡を見に参りましょう

お約束をいたします

かの女怪物 行き先いずこになろうとも

巢窟に身を隠し

地底に潜み

山中の森にこもり

海原の底に潜り

いずれの場所にあるうとも

逃げ失せることありえず

今日の所はすべての悲哀お堪え下され

王の耐えられること信じ奉る」

一三八五

## 第二十一節

エッヂセーオウの息 ベーオウルフはかく答える

「賢明なる御方 心お碎き召されるな

何人であれ友失いし者にとり

一三九〇

このとき老王すつくと立つて  
ベーオウルフのこの言葉  
神 強力な主に謝した

一三九五

フロースガールの馬の背に

たてがみ編んだ馬の背に鞍おかれ

賢明なる王 威容を示して歩みだし

歩兵の一隊 盾もつ戦士の軍進む

足跡は森の小道に延延と

地面の上を暗き荒れ野を

真直ぐにゆく

フロースガール王ともどもに務め果たした

館の守り人 若き戦士の最高者

その生命なき肢体を運んだ

貴人の息 フロースガールはそこから先

険しき岩山のぼり

狭き道 狭く寂しき道

誰知るもののない道辿り

切り立つ岩山登り越え

水の妖怪棲む幾多の巣窟通りゆく

王数名の賢者とともに進み出で

平原を見渡し見れば

山の木木年経った岩にかかり

陰鬱なる森となる様

忽然と目にはいる

森の下には血に濁り波立つ湖

湖岸に切り立つ巖の上に

一四〇〇

アツシユヘレの頭を見たとき

デネ人は皆

シユルディング人の友もまた

その心は痛み苦悶する

数多の戦士その戦士たちの一人ひとりが

嘆き悲しむ

湖のあふれる水は血潮で沸き

熱き血潮でふつつ滾る

人人その様を見つめる

おりおり聞こえる角笛の音

勇みたつ心を告げる

戦の調べあたりに響く

戦士たちみな腰下ろす

水の面にあまたの蛇族

奇怪なる海蛇泳ぐのを見

岬の斜面に

水の怪物横たわるを見る

午前中この蛇と怪物

航路に出かけ帆船に

災いもたらす

蛇と怪物戦の角笛

鳴り響くのを耳にして

一四一〇

一四〇五

一四一五

一四二〇

一四二五

一四三〇

荒れ狂いいきり立ち  
水底めざし突き進む

中の一匹弓と矢で

イエーアトの王子がしとめた  
戦の矢しつかりと

生命の臓氣に突き立ったとき

その怪物の体から生命は離れ  
水面での波との闘い

終わりを告げる

死の虜囚となつて水面の泳ぎ

ゆつたりと

逆とげついた猪狩る槍

波の落し子この奇怪なるもの

水に浮かぶを追ひ立て追いたて

激しく攻め立て

岬の上に引き上げる

男たちこの恐ろしき

捕われの客人を見た

ベーオウルフは甲冑まとい

己が生命すこしも氣にせず

胸幅広く見事に飾り

手で編んだ鎖鎧で

水面の下の探索をする

一四三五

敵意もつ手が胸板えぐり  
怒れるものの悪意の手づかみ

生命に損傷与えぬように

鎖鎧が骨つつむ身体護る

王子の頭護るのは光り輝く兜の逸品

豪華な装飾施して

見事な帯金まいたもの

波騒ぐ水中の探索のとき

この兜湖底を荒らすことになる

その昔武具甲冑鍛える鍛冶職が

後の戦でいかなる太刀も

たたき切ることできぬよう

見事に仕上げた形はそのまま

フロースガールの側に仕えるウンフェルス

まさかの時にとベーオウルフに

フルンテイングの銘もつ剣を

柄のついた剣を貸す

世に伝わる宝物の中の逸品

刃は鋼

毒に浸して焼きなまし

戦の血糊で鍛えた鋼鉄

敵軍の戦線めざし危険に満ちた遠征を

なす勇氣ある武人のうちで

一四四五

一四五〇

一四五五

一四六〇



この剣手にもつ者は

いまだ戦に敗れたことなし

この剣 勇武の舞を見せるのは

初めてではない

エッヂラーフの息 剛勇の人ウンフェルス

己に勝る剣の使い手ベーオウルフに

かの刀貸したとき

酔いに任せてこの前語つた

非難の言の葉まこと念頭になし

ウンフェルス自らは

生命を賭して波濤に逆らい

武勇を示す気概なし

ウンフェルスその場で失う

栄光と勇者の名声

ベーオウルフ合戦の身支度終えたその時は

この勇者ウンフェルスとは立場逆

一四六五

人人に黄金授ける方に申し上げる

それがし戦に出る用意

今整うたこのときに

われら二人が言い交わしたる

先のことばをお忘れ召さるな

もし陛下の御為

わが生命失うことあれば

死したる者の父親の役

王が務められるのが常

わが身辺の供の者 若き家臣の

守護者となれんこと希う

戦がそれがし連れ去るならば

お慕わしい王フロースガール

下し賜うた宝物は

ヒエラークのもと送られよ

さすればフレーゼルの息

イエーアト人の王 ヒエラーク

この宝物みて悟りましょう

宝環下し賜う人 資質すぐれた御方に

それがし拝顔の栄を賜り

生ある間御覚えめでたかつたと

世に知られた人ウンフェルスには

わが伝来の宝刀を

一四八〇

第二十二節

エッヂセーオウの息 ベーオウルフはいう

「ヘアルフデネ公の令名高き御子

フロースガール王 賢明なる君主

一四七〇

一四八五

見事な波型紋の太刀  
堅き刃のこの太刀を

お持たせ下され

それがしはフルティングにて名声博す  
さなくば死がそれがしを連れ去らん」

一四九〇

このことばを残し答えを待たず

嵐も恐れぬイエーアト族の

王子は雄雄しく急ぎ立ちゆく

波立つ水面この戦士受け止める

一日という時間がすぎて

湖底が勇者の目にはいる

餌食にかつえ残忍にして貪婪に

六月が百を数える間この広き水域

守り抜いた女怪物ただちに知った

男のひとりが水面の上から

妖怪の棲家探りに来たことを

女怪物掴みかかり

恐ろしき手に戦士を捉える

だがこの戦士の傷ひとつない身体

その身体は損傷受けず

鎖鎧がその身を守る

それ故に女怪物憎しみ込めた手の指を

一五〇〇

鉄の輪つないだ胴鎧  
戦衣に突き立てられず

この水に棲む雌狼が鎖鎧の王子引きずり

湖底に達し己が棲家に連れ込みし時

いかな勇者とはいえ武器は振るえず

数多の奇怪な生き物が

水の中勇者を悩ます

闘う牙もつ幾多の水の獣が

戦衣を引き裂かんとし

妖怪ども勇者のあと追う

その時勇士は気づく

敵意もつとある広間にいることに

広間の中水で苦しむことはない

屋根に覆われ

押し寄せる水その身かすめず

焰の明かり

赤々と燃える光の輝きを見る

心気高き人の目にこのとき映る

地底に住まう呪われた女怪物

怪力の水の女が

勇者は太刀に弾みつけ

容赦なき一撃くわえ

輪飾りつけたこの太刀は

一五〇五

一五一〇

一五一五

一五二〇

雌怪物の頭に命中

敵の血むさぼる太刀音響かす

客人は知る

戦場の光なる太刀

肉に食い込み生命に損傷与えぬことを

この刃王子のために役だたず

これまでは一騎討ちの戦いに耐え

斃れるさだめの戦士の兜たたき割り

戦衣を切り裂いた

今この宝剣その栄光ついに失う

ヒエラーク王の甥

その勇氣は萎えず

名声を心に思い

決然として立ち向かう

怒れる勇者

飾りをつけた波型紋の太刀を投げ捨て

焼き堅めた鋼の刃下に落つ

勇者己の力に頼る

己が強き握力に

男たるもの生命惜します

力の戦い挑むべきもの

戦において失せることない

賞賛得んとするならば

一五二五

戦の民イエーアトの王子はそこで

ひるむ気配さらさなく

グレンデルが母親の肩ひつ掴み

組んでも無敵のこの勇士

つのる怒りに不倶戴天の敵投げ飛ばし

女怪物床に落つ

怪物は間髪いれず恐ろしき手で攻め返し

勇者の身体引つつかむ

戦士の中で敵うものない

徒歩の戦士もひるんでつまずき

どうと倒れた

女怪物広間の客人組み敷いて

刃先の光る幅広の

短剣を抜く

心の中は息子の復讐

わが独り子のあだ討つ一念

ペーオウルフの両肩は

編んで作った胸おおう網

鎖鎧に包まれる

鎖鎧が生命を守る

槍も刃も貫けず

エツヂセーオウ王の息

イエーアトの勇者はこのとき

一五三〇

一五四五

一五四〇

広大な大地の中へ

死出の旅路に向かわんばかり

だが胴鎧 堅く仕上げた戦の網が

勇者を助け聖なる神が勝利もたらす

勇者はふたたび立ち上がる

そのとき天を支配する賢明なる主は

勇士の勝利を躊躇なく

正しく決意し給うた

一五五〇

一五五五

# 注

(53) 拙稿「ペーオウルフ（韻文訳二）」『言語と文化』甲南大学国際言語文化

センター紀要、第四号の注(33)で述べたように、「運命が成り行きにしたがって『なるようになるもの』であり、その運命を定めるのが神」であれば、その運命の先を見通せるのが賢明な人ということになる。現にここでは、神が自由に運命を変え、ペーオウルフの勇気が（おそらく神の思し召しによって）運命を変えたことになっている。

(54) フリジア 現在のオランダ最北端の地域。

(55) 子息 藤原(1999, 77)は「家臣」とする。この挿話と同じ事件を扱った古英詩「フィンネスブルフ」断章では、藤原の言うとおり、フィン王の重臣たちが敵の手にかかって次々斃れていく。しかし、この重臣たちが王子でなかったという保証はないし、王子に関する部分の詩行が、現存しないだけかも知れない。したがって、ここは原詩どおり「子息」としておく。なお、王子の名前は「ペーオウルフ」では明らかにない。

(56) ヘアルフデネ このヘアルフデネは、フロースガール王の父の名前ではなく、デネ人の国を構成する部族の一つ。原義は、「半デネ」。このくだりは当時の人々にはよく知られたことであつたのであろうが、原文のままではよく分からない。「フィンネスブルフの戦い」断章を参照しながら、

Chickering (1977, 322-326) にしたがって、幾分推測を交え、注にすべきものを本文に移し、読み物として理解できる詩行にする。

なお、原詩どおりの訳を以下に掲げておく。

この子息たち敵の奇襲をうけるとき／ヘアルフデネの英雄／シユルデ  
イング王家の人フネフ／フリジアの死闘に果てるさだめであつた／ま  
ことヒルデブルフに／ジユート族の忠節 称揚のいわれなし／なんの  
咎なくヒルデブルフは／盾打ち交わすこの戦いで／致命の深手 槍傷  
のため／愛しき人人 息子と兄を奪われる／げに 悲嘆にくれる女性  
となつた

(57) ジユート ゲルマン民族の一部族の名。

(58) この行に、「肩（の上）に」という意味不明の表現がある。イデオムであつたものと思われる。

(59) フリジアの地 Wrenn (1953, 206) は、推測にすぎないと断りながら、単なる叙事詩を飾ることばであるか、フィン館がフリジアの外にあつたかのいずれかであるという。なお、即興の朗吟であれば、話の脈絡が詩人の念頭から脱落していて、「ジユートの故郷＝フリジア」という図式だけが頭に浮かんだということは十分ありうる。

(60) 復讐を求める心見せたとき Kennedy (1940, 1968, 37) がその訳詩の中で、フーンラーヴィングが刀をヘンイエストの膝に置いたことを「それとなく見せた明らかな意思表示」としているのに従つた。

(61) 屍 原文は、「生命」。「生命の血」とする解釈もある (Kjaeber 1992, 1950) が、肉体は生命を包むものという発想があることを考えて、「肉体から抜け出した生命」の意に取り、それを逆にして「屍」とした。拙訳

「ベオウルフ (韻文訳二)」『言語と文化』第四号六ページ下段第十行参照。

(62) ウェアルフセーオウ フロースガール王の後。既出。拙訳「ベオウルフ (韻文訳二)」『言語と文化』第四号一ページ上段参照。

(63) 叔父と甥 フロースガール王とその甥フローズルフ。既出。拙訳「ベオウルフ (韻文訳二)」『言語と文化』第四号一三頁下段参照。

(64) 戦衣「胴鎧」とする訳もあるが、原詩では「衣服」を意味する語が使われている。Harrison and Embleton (1993, 1998) をみると、膝上まである布製のシャツ状の物を腰のところで紐で縛って着るのが戦いの服装であったようである。あえて「戦衣」とした。

(65) この行、原詩にはない。この行の前後数行は、理解を助ける注記を詩行の中に折り込んだところがある。

(66) 「修道院に入る」は、原詩にはない。先行部の説明として加えたもの。

(67) フランク族 ライン川流域に住んでいたとされるゲルマン民族の一部族。なお前行の「フリジア人と同盟結んだ」も原詩にはない。イエーアト族の敵として、フリジア人とフランク族の名が挙がっているところから連合軍と解した。

(68) 永きにわたり 実際は、グレンデルの死後一晩が経過したに過ぎない。おそらく、復讐者(グレンデルの母親)の悔しい思いを表すための誇張語法なのであろう。

(69) 血に飢えた獣 Hall (1894, 1960) に従う。ただし、Hallに「血に飢えた狼」とあるのを「獣」とした。

(70) たてがみ編んだ Harrison and Embleton (1993, 24) が掲載する十一世紀の写本の挿絵に、軍馬のたてがみを編んでいた様子がかがわれる。

(71) 毒に浸して焼きました この行と次行、Alexander (1973) の読みをとる。

(72) 酔いに任せてこの前語った 第八節(拙訳「ベオウルフ (韻文訳一) 一六

六一行まで)『言語と文化』第三号 十九頁 甲南大学国際言語文化センター 一九九九年) 参照。

(73) 原詩では、「イエーアト族」を意味する語の前に、しばしばイエーアトの別名として用いられる「天気」を意味する *Weder* (ウェデル) という語がついている。部族を現す固有名詞の前に、頭韻を踏むための技法として、いろいろな修飾語がつけられることは、拙訳「ベオウルフ (韻文訳二)」(『言語と文化』第三号一九九九) の「序」で述べたが、これもその例である。この「ウェデル」は、忍足(一九九〇)に従って「嵐をもともせぬ」の意に解した。

(74) 原詩の表現は「半年が一〇〇回」。

## 参考文献

- Alexander, Michael (trans.) 1973. *Beowulf: A Verse Translation*. Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin Books.
- Bessinger, Jr., J. B. (read by) 1967. *Beowulf*. Caedmon Audio. New York: HarperCollins Publishers, Inc.
- Britannica CD-Rom, 1997. *Britannica CD Version 97*. Encyclopaedia Britannica, Inc.
- Chambers, R. W. 1952. *Beowulf with The Finnsburg Fragment*. Edited by A. J. Wyatt. New edition revised with introduction and notes by R. W. Chambers. Cambridge: at the University Press.
- Chickering, Jr., Howell D. (trans.) 1977. *Beowulf: A Dual-Language Edition*. Anchor Books. New York; London; Toronto; Sydney; Auckland: Doubleday.
- Crossley-Holland, Kevin (ed. & trans.) 1982. *The Anglo-Saxon World*.

Woodbridge: The Boydell Press.

Fujiwara, Yasuaki (藤原保明) n. d. 『古英詩の世界』『言語文化論集』五〇号別冊。筑波大学現代語・現代文化学系。

Hall, J. R. Clark (ed.) 1960<sup>1</sup>. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. With a supplement by Herbert D. Meritt. Toronto: University of Toronto Press in association with the Medieval Academy of America.

Harrison, Mark & Gerry Embleton. 1993. *Anglo-Saxon Thegn 449-1066AD*. Reprinted 1997, 1998. Warrior Series 5. Oxford: Osprey Publishing Ltd.

Hasegawa, Hiroshi (長谷川 寛) (trans. & annotator) 1990. 『ベオオルフ』怪物破壊魔(グレンデル)退治の巻(1)。東京、成美堂。

Hazome, Takeichi (羽染竹一) (ed. & trans.) 1985. 『古英詩大観—頭韻詩の手法について—』東京、原書房。

Heaney, Seamus (trans.) 1999. *Beowulf*. London: Faber and Faber, Ltd.

Kennedy, Charles W. (trans.) 1940. *Beowulf: The Oldest English Epic*. Translated into Alliterative Verse with a Critical Introduction. Renewed by the translator in 1968. First issued as an Oxford University Press paperback, 1978. Oxford: London: New York: Oxford University Press.

Klaeber, FR. (ed.) 1950<sup>5</sup>. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*. Lexington, MA: D. C. Heath and Co.

Nagano, Shigeru (長埜 盛) (trans.) 1967. 散文全訳『古英詩 ベーオオルフ』附 フィンネスブルグ争乱断章。東京、吾妻書房。

Ōba, Keizō (大場啓蔵) (trans.) 1985. 新口語訳『ベオオルフ』改訂版。東京、篠崎書林。

Oshitani, Kinshirō (忍足欣四郎) (trans.) 1990. 中世イギリス英雄叙事詩『ベオオルフ』岩波文庫 赤 275-1. 東京、岩波書店。

Sato, Noboru. 1988. *An Interlinear Beowulf*. The Complete Text Edited, with the Interlinear Verbal English Translation and Interlinear Grammatical

Note for Each Word, and the Opposite-Page English Translation, and with a Table of the Royal Genealogies Appended. Tokyo: Language Press.

Suzuki, Shigetake (鈴木重蔵) (ed.) 1969. *Old English Poetry Beowulf*. 東京、研究社出版株式会社。

Sweet, Henry. *The Student's Dictionary of Anglo-Saxon*. Impression of 1953. Oxford: At the Clarendon Press.

Tuso, Joseph F. (ed.) 1975. *Beowulf: The Donaldson Translation, Backgrounds and Sources, Criticism*. A Norton Critical Edition. New York: London: W. W. Norton & Company.

Underwood, Richard. 1999. *Anglo-Saxon Weapons and Warfare*. Brimscount Port Stroud, Gloucestershire: Tempus Publishing Limited.

van Kirk Dobbie, Elliott (ed.) 1953. *Beowulf and Judith*. New York: Columbia University Press.

Wrenn, C. L. (ed.) 1953. *Beowulf With the Finnesburg Fragment*. London: George G. Harrap & Co. Ltd.

Wyatt, Alfred J. (ed.) 1962. *An Anglo-Saxon Reader*. 10th impression. Cambridge: At the University Press.